

方路而修理に對しての砂利採集距離及路面に必要な砂利の量並に耳芝や側溝、並樹等に要する勞役量を之れ亦調査し無理ならぬ程度の擔當區域を定めて一戸平均五人を本體として時々人員は加減することを許して服業させることとしたのである。此の夫役賦課が平均一戸五人となつて居るので例へば働く人が一人しか居ないにした所で年には五回出役すればよいのであるから七十三日に一回一戸から一人出れば事足りるので、此の位の義務は大した慘酷なもの

國道と橋梁 (一)

藤田宗光

でもないと思ふことが出来るのである。(完)
跋||首題の下に當紹介欄で「其の四」までを記述して居た處、何彼と取紛れ中絶したことを謝し、茲に「其の五」を稿して一先此の稿を完了したいと思ふ。實は朝鮮にも道路改良の獎勵策として道路愛護會などもあつて此の記事も書きたいと思つて居るが好資料が手に這入つたならば、其の機會に御紹介もしたいと思つてゐる。(完)

目次

一、國道と河川

(一) 緒論

説

苑

(二) 國道

(三) 河川

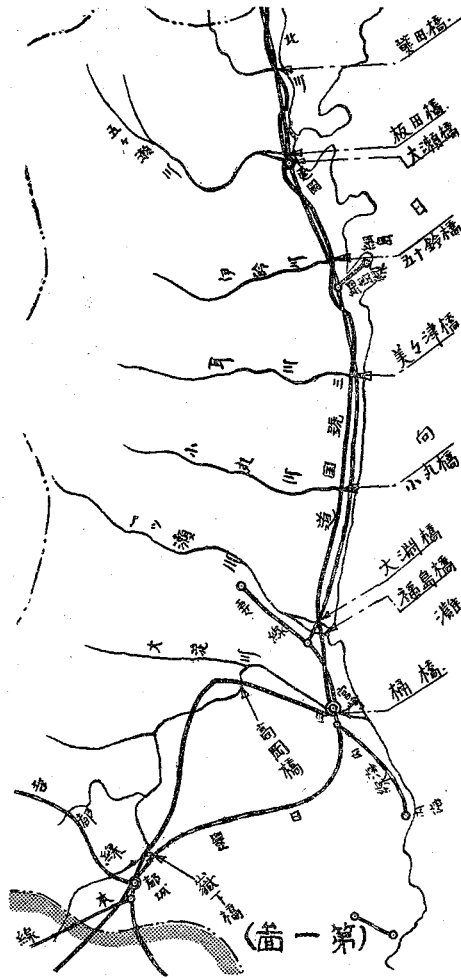
(四) 橋梁

二、國道と延岡

(一) 延岡市の發展

(二) 國道と板田橋、大瀨橋

(圖面添付)



第一圖

宮崎縣は近時新興縣として、あらゆる方面に急速なる躍進を見るに至り、最近世人の大いに注目する所となつた。

抑々宮崎縣は皇國日本の發祥地にして、日本歴史の一頁

一、國道と河川

一、緒論

を飾り祖國日向として、古代より其名夙に顯はれ、日向人の唯一の誇りとする所であり到る處に名所、舊蹟散在し、神祕國として、幾多の傳説と歴史を有し他縣に類を見ざる

天與の樂土である。

之を地理的に見るに、帝國日本の寶庫たる九州の東南部に位し、北は大分縣に隣接し、西は九州山脈の山岳連亘して熊本縣と境を劃し、西南は鹿兒島縣に接續す、地積五百一方里にして、東方一帯は洋々たる日向灘に面し、沿岸延長蜿蜒實に七十七里に及び到る處、風光明眉にして、氣候亦溫和天與の恩恵に浴し、人口八〇萬を抱擁する。

然るに過去十數年以前迄は交通の便備はらず加ふるに海岸一帯は所謂白砂青松を以て蔽はれ、港灣としても見るべきもの更になく、唯細島、油津の如き二港灣を除きては殆んど數ふべきものなく、爲に折角天與の恩恵に浴し乍ら他縣との交通商取引を缺き、延いて他縣の産業文化の恩恵に浴する事を得ず、徒らに放任され、各種の産業開發の阻害される事久しきに及んだのである。

大正十二年國有鐵道日豊本線の開通を見るや之を契機として、他縣との交通も繁劇を極め更に縣内國道の改修、縣道の新設に力を注ぎたるため、急激に産業勃興し年と共に

發展し、最近に至りては交通機關も全く備はり、豊富なる天與の山産物、水産物等年々好成績を齎らし、他縣に販路を開拓し帝國の産業開發に寄與するに至つたのである。

一國の興隆、一縣の發展を齎らすは實に産業勃興の如何によるべく、産業の勃興たるや、亦地理的環境に基因し、交通の便備はるにあらざれば到底之が圓滿なる發達は期待し得られないのである。

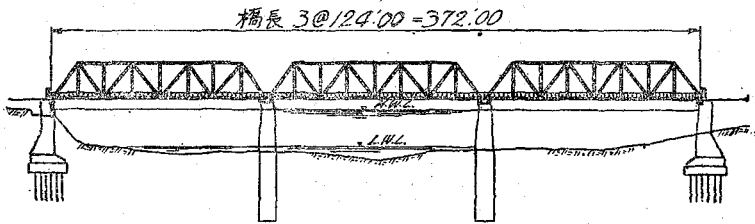
茲に於て地方産業の開發に將又地方都市の興隆に最大なる關係を有する國道と河川につき、新興宮崎縣が(第一圖)如何に力を注ぎつゝあるか、如何に産業の振興、文化の進展に寄與しつゝあるかを述べん。

二、國道

我が宮崎縣に通ずる主要路線は南北に貫通する三號國道である。交通經濟政策上最も重要な地位にあるは國道にして、帝都は元より地方産業の開發は實に之に基因するものにして、道路交通の設備如何が中央、地方を通じて如何に緊要なるものかは言を俟たざる所であるが、之が完備と

施設の如何は實に一國一縣の繁榮を意味するものである。都市たると農山漁村たるとを問はず、道路の施設は産業の發達並に都市の繁榮に極めて重大なる關係を有するものである。

試みに我が宮崎縣を見るに最も顯著なる一例であらう。宮崎縣は今日漸く新興縣として進出するに至りたるも、其發展の緒を見るに至りたるは實に十數年以前の事にして、その進歩の遅々たりしは道路設備の未完成に基くものなりといふべきである。一縣の興隆を期せんとせば先づ道路交通の利便を増進し、あらゆる運送費を軽減し、以て各種産業の振興を圖らねばならぬ、近時交通機關の發達に伴ひ、道路設備も益々複雑とな

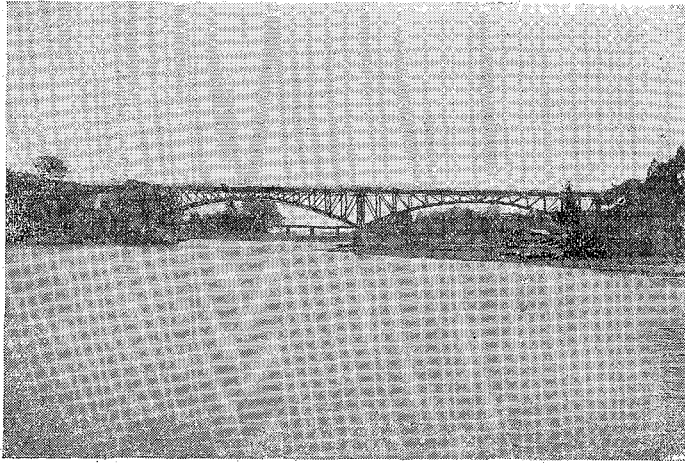


第二圖

るに至つたのであるが、之が完成を一日も忽緒にすべからざるものにして、本縣の最も力を注ぎつゝあるは、誠に喜ばしい事にして、今や縣道、市町村道に至りても面目を一新しつゝある状態である。縣下の三號國道を見るに、隣接大分縣より本縣の最北部たる東臼杵郡北川村に入り、それより順次南下し、東海村、延岡市を経て富高、美々津、高鍋等本縣東部の平地を縦貫し宮崎市に至り更に之より西に曲折し、高岡、高城を經由し都市に至る、こゝより五十市村を経て鹿兒島縣に通するのであるが、この間十數條の河川西部山岳地帯より東奔し、日向灘に注ぐ、之

がため幾多の橋梁の架設を見るに至つたのであるが、從來は極めて貧弱なる橋梁なりしたため交通意の如くならず、縣政上幾多の不便を感ずること久しかつた。

昭和八年度現在に於ける縣内道路の趨勢を見るに前記國道の延長一八七、九五米、府縣道一、九四一、五四米となり、一方料當りにつき國道は二、四二七米、府縣道に於いては二五、〇九一米となる、更に之を全國の一方料につき比較するに、國道にありては、二三七米長きも、府縣道に於ては二、一〇九米短い、而して橋梁にあつては國道四、五四八米、府縣道一五、五四二米となつてゐる、府縣道にありては、本縣としては短日月の間に斯くの如く發達



を見るに至つた事は一驚すべきであるが、しかし全國に比較する時、今後尙一層の努力により増設すべき必要を感ずるのである。

三、河川

我が國の道路史を見るに、一時は大いに發達した時代もあつたが、幾多の變遷を経て徳川幕府となるに及び、各地に藩を置き諸大名をして、

圖

之が政治を行はせしため、各藩は自衛上道路の險要を望み且道路橋梁の改良を喚起すべき交通用具さへ普及する事を抑制する有様にして、道路

第

交通により藩の勢力を助長するが如き政策は毫も講ぜられなかつたのである。之がため、大川等に於ける架橋については絶対に許されず、凡て渡船による制度となし、之等の制度は明治の新政に至る

途續いたのである。故に我國に於ける道路、橋梁、河川、港灣等に對する諸施設の完備は極めて最近の事にして、之が國內全般に亘りて非常なる發達を見るに至りたるは、誠に驚歎すべき顯著なる事蹟といふべきである。而して之等河川、橋梁等が如何に近代文化の發達に貢獻するかは自ら明にして、今後益々斯界の發達に努力しなければならぬ。

本縣の河川並に橋梁につき見るに、河川は地勢の關係上北西部より、東部に向ひ日向灘に注ぐのであるが、其の主なる河川及之に架設せられたる主要なる橋梁を順次北部より擧ぐれば次の如くである。

一、北川 本縣に於ける最北部の河川、水源地は大分縣重岡にして、本縣内の北川、東海の兩村を経て、河口は延岡市を貫流する五ヶ瀬と合す、延長一三里二二丁に及ぶ。

二、五ヶ瀬川 水源地は本縣最西部の山村たる鞍岡村にして、蜿蜒實に、三三里一四丁に及び正に本縣第一たり、下流に延岡市あり、ここにて大瀬川の支流を作り更に合して東海村に入る、北川と合して河口は延岡港となり、縣北

水運の源泉地となる、水郷延岡の名は之による。

三、伊鈴川 伊鈴川は源を隣村北郷に發し、門川の村落を経て門川町の中央を貫流し海に注ぐ延長一四里三丁。

四、耳川 耳川は一名美々津川とも稱す、延長二八里一二町にして、源は熊本縣と界を劃する椎葉村にして本縣主要河川たり。下流の美々津町と岩脇村とは、この河川を以て界とす、筏の便よく山産物の搬出に利用さるゝも、耳川は歴史的に最も名高く、其名は三千年の昔に遡る、即ち神武天皇御東征の御御船出の御遺蹟として顯はれ、今尙美々津の立磐神社境内には神武天皇御腰掛石といふのがある。

御進發に際し、この石に御腰掛になり御勵まし遊ばされたと傳へられ、世人の崇敬する處である其後耳川は天正六年に至り、大友宗麟と島津義久との合戦による古戰場としても名高く、郷土史上實に燦たる地といふべきである。

五、小丸川 水源地は同じく椎葉村にして、延長一七里二九丁、下流は上江村にして高鍋町と隣接し、幅員の廣き事を以て知られ、之に架設せられたる國有鐵道日豊本線の

鐵橋延長は九州一と稱せらる。

六 一ツ瀬川 水源地は之亦同じく椎葉村である。延長二〇里に及び、下流は富田村にして、廣瀬村と劃し日向灘に注ぎ、兒湯平野の灌漑となる。

七 大淀川 源を遠く鹿兒島縣末吉町に發し、蜿蜒、曲折して都城市に入り、更に高城、高岡の各町を経て宮崎市を貫流し赤江灘に注ぐ、縣下の河川中水量最も多く、新興郡市宮崎に無くてはならぬ河川である。延長亦二三里六丁に及ぶ川幅の廣きことも小川丸に次ぐものにして、河川として縣下第一と稱すべきである新興優縣としての途上にある宮崎は實に茲に源を發すといふべきである。

以上は本縣河川の主要なるものにして、之等の河川が如何に其地方の産業に貢獻するかは極めて明らかな事である。然るに一面亦之等河川の數多く存在することは交通の發達を阻害し、延いて土木事業の進捗に支障を來し、小は一村の繁榮に、大は一縣の興隆に迄影響するものである。

茲に於て初めて完全なる交通の發達に關し、道路の完成と

橋梁の必要が生ずるのである。

四、橋 梁

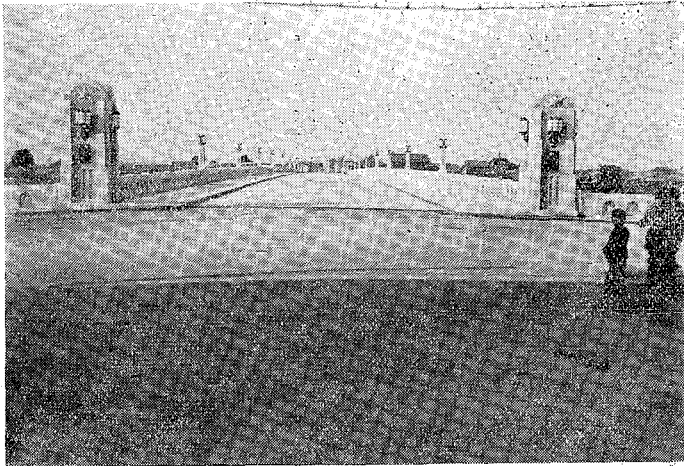
曩に交通經濟政策上重要なものとして、國道を擧げたのであるが、之と同様橋梁の架設といふ事は緊要なるものにして、前者に勝るとも決して劣らないのである。

願れば本縣は昭和の今日漸く世人の認識を得るに至りたる、極めて後進の新興縣にして、未だ開拓の途上にありといふべく、今日他縣に伍し其新興の意氣に燃ゆるは喜ぶべき現象なるも、いはば漸く水平線上に一步を踏み出したるに過ぎず決して他縣に率先優縣となりたるものにあらず、其多くは他縣の恩恵に浴すること極めて多し、然るに今や着々各種の事業勃興し、縣政に寄與することを得るに至りたるは、一重に縣内交通施設の整備に起因するものにして、其後進たるや地理的幾多の障害ありたるによるものといふべく、此の點甚だ惠まれざる所にして誠に遺憾の極みとする所である。即前述河川により之が交通の完壁を期するには一に橋梁架設を待たねばならないのである。今でこ

その他縣に誇り得る橋梁の完成を見るに至りたるも、十年前迄は實に微々たるものにして木橋以外は殆ど見る事の出来ない状態であつた。

縣下の國道線に於ける橋梁數は凡そ一六三、縣道に於けるもの八六三の多きに及ぶのであるが、其中三號國道線につき前記河川に架設中の主要なるものを擧ぐれば次の如くである。

一、熊田橋（第二圖）之は北川に架設せられたるものにして、延長一四・五米、幅員五・五米にして、橋種はワーレン式構橋である縣北に於ける唯一の最近式橋梁と稱すべきものにして、總工費六七、八七二圓を要し、昭和七年六月竣功を見るに至つた。



である。

二、坂田橋

延岡市を貫流する五ヶ瀬川に架設せられたるものなるが、之は延岡市に取りて最も重要なものにして、目下内務省の直營工事として、完成を急いでゐる。延長百十六米にして幅員十五米總工費二十萬圓の見込である。

圖

橋種はゲルバー式鐵筋混凝土橋である。

四

三、大瀬橋 同じく延岡市の中央に通ずる橋梁にして、大瀬川に架設せられたる木橋である。

第

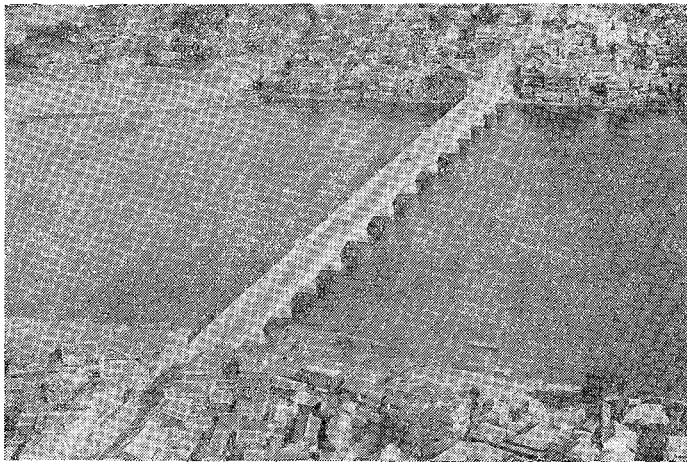
本縣橋梁中最古の架設に屬し、明治二三年七月工費五千三百七十一圓を投じ架設せらる、幅員四・九米、延長一六・五米、坂田橋と同様本市交通經濟上なくてはならぬ重要橋梁

四、五十鈴橋 門川町に存在し、伊鈴川に架設せらる、幅員四・五米、延長一一八・二米、

橋種は、鐵鋼拱橋である。明治二八年工費二千七百七十九圓を以て架設し、當時に於ける最新式の橋梁である。

五、美々津橋 (第三圖) 耳川に架設せられたるものにして、本縣橋梁中最も新しい建設である。昭和九年三月竣功したる本縣第二の橋梁である。橋種は鐵鋼拱橋にして、幅員七・六米、延長一六五・六米に及び、總工費拾八萬九千二百十八圓を投じて竣功す、新興宮崎縣の橋梁として決して遜色なき美觀を呈してゐる。

六、小丸橋 小丸川に架設せられたる木橋にして幅員三十六圓を投じて竣功す。



九千七百圓。

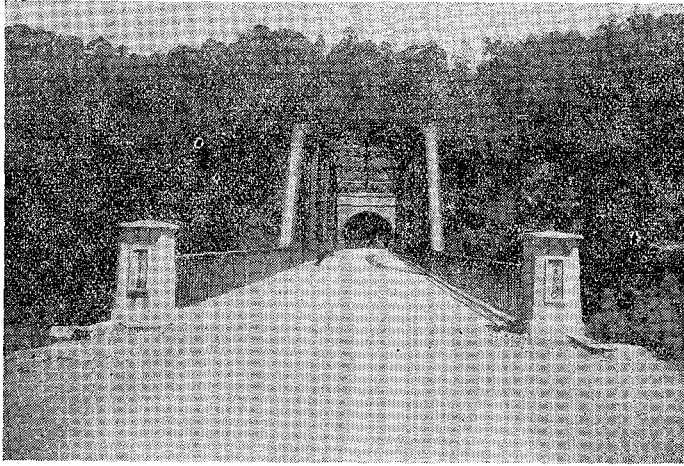
七、大淵橋 一ツ瀬川に架設せられ、富田村に存在す、同じく木橋にして、國道線橋梁中最も古く明治十九年十二月竣功し、幅員四・五米、延長に於ては本縣第二、一六三・六米あり、工費壹千九百三十一圓を投ず。

八、福島橋 同じく一ツ瀬川下流に架設せられ、廣瀬村に存在す、大淵橋と相離ること僅かに一丁、ハウ式トラス木橋にして、明治四四年八月建設され、當時に於ける新式橋梁として名高く、幅員四・五米、延長

一一六・一米、總工費四萬四千八百

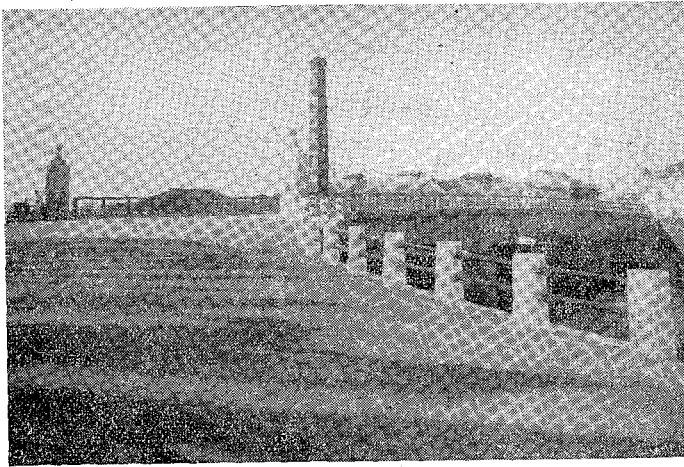
以上三橋共木橋にして、延長も相當あるを以て國道橋梁

として之が架替を必要とする。共に交通頗る頻繁を極め、今後益々交通量の繁劇を加ふるに當り一日も早く近代的橋梁の架設を見なければならぬ。



第六圖

九、橋橋（第四圖、第五圖）之は本縣第一の橋梁にして、他縣



第七圖

に誇る近代的模範橋梁である。大淀川の下流に架設せられ、宮崎市の中央に位す鐵筋コンクリート無鉄拱橋にして幅員一六・

四米、延長三八五・五米、總工費九二七、八〇〇圓を投じ、

昭和七年四月之が竣工を見るに至りたるものにして、之ぞ本縣橋梁史のみならず我國橋梁の發達を物語るものにして實に近代的橋梁の極致と稱すべきものである。新興宮崎市の唯一の誇りであり、躍進宮崎のシンボルであり又九州第一の橋梁である。

一〇、山下橋（第六圖）大淀川の中流に架設せらるゝ高岡町に存在し、ワーレン型構橋にして昭和六年三月完成、幅員五・五米、延長九六・四米、總工費四萬四千五百圓、縣北熊田橋と同様近代的橋梁として堅固を旨としてゐる。

一一、嶽下橋（第七圖）大淀川の上流に架設せられ、都市に存在す、橋種、ゲルバー鋼桁橋にして、幅員二・七米、延長七六・六米、總工費六一、六〇一圓を投ず、昭和八年五月竣工、都城市唯一の橋梁である。

以上に於て大體の本縣國道交通の趨勢と橋梁について述べたのであるが、之等の施設漸次整備するに従ひ、農村並に都市が如何に繁榮するに至るか極めて明である。

本縣に於ける市制施行都市は、宮崎、延岡、都城の三都

市にして、之が都市としての主體を觀るに、宮崎市は一縣の行政中心地であり、延岡は近代文明による、化學工業都市と稱すべく、都城市は軍事上による都市といふべきである。

以上都市の發達は躍進宮崎縣の姿であり、遅れ乍ら新興の意氣に燃ゆる、近代日本の優縣として進出する道程である。就中最も著しく發展し、今後更に見るべきものある新興都市延岡につき其動向を見るに、茲數年來躍進に次ぐ躍進を以てなし、一躍工業都市として進出したる狀況を述べたい。

×

×

×

×